

第三十二章  
グレーデッドの真意

「日本海溝深海からミサイルが発射されました」

「なに！」

防衛省中央コントロールルームからの緊急通報で国連から戻って時差調整のために仮眠していた鈴木一佐が起きあがると特殊携帯電話に耳を付けたまま廊下に飛びだす。

「ミサイル到達地点は？」

「北陸もしくは近畿北部と推定されます。詳しい着弾点確定まで少し時間がかかります」

「迎撃の手はずは？」

「検討中です」

「検討せずにすぐ手配しろ！」

鈴木は走りながら現状を想像する。海が後退していないときは、まず海上に展開するイージス艦がミサイル迎撃に当たる。いわゆる第一次防衛ラインだ。この防衛ラインを突破されたら旧日本列島各地に配備されたポトリオットミサイル防衛隊、すなわち第二次防衛ラインが迎撃に当たる。しかし、イージス艦は日本から遙か遠い海上でなすすべもなく停船している。

中央コントロールルームのドアが音もなく横にスライドすると鈴木は壁一杯に広がる巨大なモニターパネルを見上げる。

「着弾地の絞り込みは？ 核ミサイルか？」

「……」

「どうした！ 応えろ！」

パネルの中央上部に福井県の航空写真が現れると、ある地点がズームアップされる。

「福井原子力発電所です」

「迎撃可能なミサイルは？」

「大阪城のポトリオットだけです」

「迎撃態勢は」

「それが……」

「どうした！」

「大阪城ミサイル防衛隊は花見で休暇中です。数名を残してほとんどの隊員は西の丸庭園でどんな騒ぎしているようです」

鈴木が肩を落とす。未確認のミサイルが間もなく大阪城の真上を通過する。花見で盛り上がる防衛隊員や大衆には流れ星にしか見えないだろう。

「福井県庁と福井原発にミサイル到達時間を知らせろ。それとミサイルは核弾頭を積んでいないとも」

「えー！ もしグレーデッドのミサイルなら核ミサイルのはずです」

「間違いなくグレーデッドのミサイルだ。しかし、原発を攻撃するのなら核は不要だ」

「県庁と原子力発電所に回線が繋がりました」

「すぐ伝える」

「混乱するだけです」

鈴木はそう発言した通信士の背中を強く押す。

「その時期が早いか遅いかだけだ。ぐずぐずするな」

鈴木は萎縮しそうになる気持ちを奮い立たせて次々と命令と指示を続ける。

「韓国軍や中国軍への通報は？」

「韓国軍には通知済みです」

胸のポケットから別の携帯電話を取り出すとボタンを押して鈴木はイライラしながらパネルに表示されたミサイル到達時間を示す表示を見つめる。

「チェン！」

流暢な中国語で現状を伝える。すぐチェンの緊張に満ちた声が返ってくる。

「幸いなことに中国海軍の、そちらで言うイージス艦が日本海、いまや湖となった日本海湖に閉じ込められているが、とにかく迎撃命令を出した」

「ありがたい。しかし、海面後退が起こった今は偏西風が弱まり気まぐれな風が吹く。日本海湖側の原子力発電所に万が一の事故が起きると中国も何らかの影響を受ける可能性が高い」

「なるほど。確かにそうだ」

ふたりの会話を遮る報告が入る。

「ミサイルが高野山上空を通過！」

「大阪城上空まで何分で到着する？」

「約三分」

「大阪城ミサイル防衛隊に命令！ 全ポトリオットを発射！ 迎撃に失敗したら自爆させろ」

「えー」

「命令を伝えろ！」

——チェン、頼むぞ。お前だけが頼りだ

「大阪城ミサイル防衛隊から二分後にポトリオットを発射するとの入電あり」

「命令の確認を」

\*

「昼間はいい陽気だったのに」

「やっぱり夜は冷えるな」

ライトアップされた大阪城と夜桜を見上げてにぎやかな歓声があちらこちらで上がっているが、徐々に冷たく重い空気が地面を覆う。そのときその地面がかすかに揺れて少し離れたところから低い機械音がある。一般の花見客には分からないがミサイル防衛隊員がすぐ反応する。酔っていても日頃の厳しい訓練経験で何が起きるのかすぐ理解する。

「ポトリオットが発射準備に入った！」

全隊員が立ち上がると上空を見つめる。

「あれは？」

南の空に流れ星のような光跡を確認する。西の丸庭園からは見えないが大阪城の東側にある水がない堀、いわゆる空堀が裂けて迎撃ミサイルが姿を見せる。

「全員、避難しろ」

一番階級の高い隊員が大声をあげる。すると部下が口々に大声を発する。

「ミサイルがこっちに向かってくる」

「何が起こったんだ！」

「詳しいことは分からない。ポトリオットが迎撃態勢に入った」

酒に酔った周りの花見客が騒ぎ出す。

「えっ！ 大阪城にポトリオットミサイルが配備されていたのか」

「知らなかった」

「危険だ！」

何人かの隊員が警告を繰り返す。

「避難しろ！ 逃げ！」

花見客の中には隊員を冷ややかに見つめる者がいる。

「悪い冗談はよせ」

すると同じ声があちらこちらで上がる。

「我々は大阪城ミサイル防衛隊の隊員です。非番で花見をしていますが……」

「避難しろと言ったって、大阪城公園全体が避難指定地域じゃないか。ここより安全な場所があるのか？」

誠しかりの声に隊員が絶句する。

「そうだった……」

その声を打ち消すように空堀からポトリオットが発射される。轟音と閃光に誰もが上空に視線を移す。一挙に周辺が明るくなって白煙が西の丸庭園に侵入する。何とも言えない異臭が鼻を突く。しばらくすると上空が昼間のようにパツと明るくなってから大音響が地表に到達する。女性の悲鳴がするがほとんど聞き取れない。

「花火じゃない」

「何が起こったんだ！」

夜空は見えるが、すべての酒が蒸発したかのようにモヤが広がって隣近所がよく分からない。

\*

「なぜポトリオットを自爆させたのですか」

「とにかく緊急事態を知らせるためだ。危険が迫っていることを知らしめなければならぬ」

「中国海軍の艦船からミサイルが発射されました」

「チェン……」

「迎撃地点は？」

「計測不能」

「ミサイルの高度、急速に低下」

「間に合うか！」

最大の緊張感が防衛省中央コントロールルームに充満する。スクリーンにふたつの航跡の接近が表示される。しかし、それぞれの航跡は接触することなく離れる。

「外れました」

鈴木は一瞬うなだれるが大声をあげる。

「放射線対策特殊部隊を福井原発に派遣しろ」

「今し方、特殊部隊のヘリが福井空港を離陸しました」

ミサイルの航跡がスクリーン上の福井原発付近で消滅する。

「福井原発を呼びだせ」

「こちら福井原子力発電所、緊急対策本部」

いつの間にか鈴木がマイクを握っている。

「ミサイルは？」

「旧敦賀湾に落下しました」



「爆発は？」

「ありません」

「原発は？」

「間もなく停止します」

「完全に停止したらすぐ知らせてくれ」

鈴木はマイクを机に置くと誰に言うともなく命令する。

「陸上自衛隊にミサイル到達地点に向かうよう指示しろ」

「分かりました」

「航空自衛隊は現場にいつ到着できる？」

「え！」

「航空自衛隊に命令を下していなかったのか？」

鈴木は航空自衛隊の幹部に歩み寄ると拳を振り上げるが何とか自制する。間違いなく航空自衛隊の指揮官は一佐ごときの海上自衛隊の鈴木に嫉妬を抱いていた。

「すぐ手配しろ！」

鈴木が怒鳴る。

「申し訳ありません」

鈴木が航空自衛隊の指揮官の肩を叩く。

「心配するな。私が全責任を持つ。命令がなくても最善を尽くしてくれ。それぞれの部署で思う存分活躍してくれ」

「分かりました。ミサイル到達地点の調査に入ります」

そのときチェンからの電話が入る。鈴木は携帯を耳にすると部屋の隅に移動する。

「鈴木、申し訳ない。迎撃に……」

「チェン、ありがとう。結果はともかくミサイルは福井原発を直撃しなかったばかりか、爆発しなかった」

「それは承知している」

「悪ふざけでないことだけは確かだ」

「グレーデッド……力の誇示？ 何が狙いだ」

「いずれにしても原発が我々のアキレス腱だということが、地震、津波そしてグレーデッドのミサイル攻撃でいやというほど分かった」

「そのとおりだ……で、どうする？」

「すべての原発を止める」

「そんなことをすれば日本は停電で大混乱するぞ」

「中国人のチェンに心配して貰えるとは思ってもいなかった」

「国籍など関係ない。僕らは親友じゃないか」

「停電しようが、工場が止まろうが関係ない。もちろん病院や通信関連施設には配慮する。私はいつでも切腹する」

「時代遅れだ。そんなことを言っても国民は納得せんぞ」

「納得して貰おうなど毛頭考えていない」

「鈴木、自棄になるな」

「僕は冷静だ」

「何を考えている？」

「チェン。顔を見たい。こちらに来てくれないか」

「喜んで」

\*

田中や山本や両大家が見つめるテレビでは、国民に向けて今回のミサイル事件の記者会見に応じる鈴木一佐が映っている。誠実さがにじみでた分かり易い報告だった。続いて中国海軍がミサイル迎撃に力を貸してくれたことを付け加えてから、すぐ後ろに座るチェン大佐に謝意を示す。そしてグレーデッドの犯行声明を披露する。

「それは短いメッセージでした。『原発を造るな。原発はすべて廃炉にしろ。それができないのなら、グレーデッドが代行しよう』と」

鈴木に促されてチェンが起立すると深々と礼をしてから鈴木の前横に歩み寄る。そしてマイクを

手渡されると流暢な日本語で話し出す。

「まずグレーデッドのミサイルを迎撃できなかったことを深くお詫びします。言い訳でも敗北宣言でもありませんが、グレーデッドのミサイルを迎撃できる可能性は極めて低い。中国政府は、この私の見解を個人的なものだと否定するかも知れませんが、中国軍のうち少なくとも中国海軍は私の指揮下にあつて今のところ私は国賊にはなっていない。だからここにいます。なぜ、ここにいるのか。それは日本を引っぱる鈴木、あえて呼び捨てにします。なぜなら親友だからです。鈴木は今や中国より広い国土を持つ日本の現実的な指導者です。だからその鈴木がこの日本をどのようにして立て直していくのか興味があります。そしてその方策を教えて貰うために来ました」再度カメラに向かって、そして鈴木に向かって深々と頭を下げる。これまでのどの中国人がしたこともなかった人間味溢れるチェンに盛大な拍手が送られる。その拍手を破るような大声を鈴木があげる。

「逆だ！」

拍手が急停止する。鈴木がチェンを直視してからチェンよりもっと深く頭を下げると毅然とした表情で問う。

「平和惚けた国民に停電を強要しようと考えている。どう思う？」

「原発を止めるのか」

「そうだ。でもグレーデッドの脅しに屈服したのではない」

「詳しく聞きたい。それは私だけではないはずだ。すべての日本国民、いや世界中の人間が聞きたがっているはずだ」

鈴木とチェンの視線が固まったまま動かない。先に視線を外したのは鈴木だった。

「わかった」

鈴木はチェンから正面に顔を向ける。

「私はあくまでも暫定的に日本の指導者になっているだけで、クーデターで政権を手に入れた訳でも選挙で選ばれた訳でもない。全世界から集まって頂いた記者や来賓のチェンはもちろん広く国民から助言をいただくために、ここは言いたい放題言わせて頂く」

後を気にすることがない立場だからと言えばそうかも知れないが、鈴木はここが最大の山場だと判断したようだ。

「東日本大震災と大津波によって関東電力の福島原子力発電所がメルトダウンした後、日本のすべての原子力発電所が一旦停止した。しかし、その後再稼働を懸念する多数の意見より停電を恐れる企業を中心とした圧力に、いつもは亀のようにゆっくりとしか行動しない政府が、驚くべき速さでいい加減な基準を作って次々と原子力発電所を再稼働させた。そしてご存知のとおりあの海面後退という大事件が起こった」

ここで鈴木が一息入れる。目の前の水が入ったコップを見つめるが手はつけない。

「メキシコ湾に穴が開き海水が吸い込まれて海岸線が後退した。地球規模の大異変。再び想定外

の事件。東日本大震災でメルトダウンした原子力発電所に対する脳天気さに輪を掛けたような対応に終始して、結局原子力発電所の運転を止めずに放置したまま総理大臣以下すべての大臣や事務次官などの高級官僚が姿を消した」

立派な服の大家が大きく頷く。質素な服の大家と田中が小さく頷く。一方、山本は鈴木の後ろに控えるチェンを見つめる。チェンが鈴木と痛々しいほどの緊張感を共有していることに気付く。「ところで先の大戦で国土を破壊されて失う物さえない日本人はゼロという平等なスタート地点から前向きに歩き始めた。工夫して何とか生き延びようと誰もが努力した。しかし、ともすれば挫折しそうになるが励まし合って頑張った。そのうち顔をあげると遠くに小さな光が見えるようになった。その小さな光がどんどん明るくなって眩しくて正視できなくなったところ、改めて周りを見ると物が溢れるようになった。励まし合っていた人々の姿が消えていつの間にか目の前には見えない黒い雲が浮かぶ……放射能です」

鈴木は正面を見すえて語る。目の前のスピーチ机には水が入ったペットボトルと紙コップが置いてあるだけで原稿はない。

「このような光景はあの戦争中のように敗北がひたひたと訪れ、やがて敗戦に追いつめられるという恐怖感とはまったく違う。ある意味、今の方が恵まれているし、逆にひどい！」

鈴木が断定的に結論めいた言葉を口にする。

「豊かさから一気に困難な環境になれば誰も絶望的になる。先の大戦では戦争に突入したときは

『勝った、勝った』と景気が良かったが二年も経たないうちに暗くなった。同じように原子力発電所が再稼働すると元の便利な生活に戻ったので再稼働に対する批判は消滅した。そして時の政府は原子力発電のお陰で化石燃料の消費が抑えられるから温暖化で海面が上がるといふ事態も避けられると大宣伝した。しかし、逆に海面は急降下した。この想定外の出来事に政府は政権を投げだすといふ想定外の行動に出た」

ここで初めて鈴木はペットボトルの栓をひねると紙コップに水を注ぐ。

「いつしか、このような紙コップで水を飲むようになった。昔は立派なガラス製の水入れにお揃いのデザインのグラスに水を注いで喉を潤して講演した。それは高価な物だったが何度も使えた。でも今はこのペットボトルも紙コップも使い捨てだ。過去に戻ろうというのではない。むしろ昔の方が贅沢で今の方が質素なのかも知れない。トータルでどちらが無駄のない、つまり資源を無駄にしない方法かということだ。ペットボトルの水を紙コップで飲む方がいかにも質素に見える。しかし、本当にそうなのか。水道水が汚染されたから安全な水を遠方から船やトラックで運んで原油で造ったペットボトルに詰めた高い水を飲む。一方、ガラスの水入れに注がれた水道水をグラスで飲む。洗って何度もその水入れやグラスを使う。皆さん、私の言いたいこと、分かりますか？」

「鈴木」

いつの間にかチェンが鈴木の後ろに立っている。

「私には鈴木心が読めた。しかし、今は目の前の事件の解決を優先すべきだ」

鈴木が振り返る。

「先送りか」

「そうではない」

チェンが否定する。

「わかった。それで」

「グレーデッドの今回の行動は警告だ。全世界の原子力発電所を停止させろと言うことだ」

「そうではない」

今度は鈴木が否定するとチェンが真剣な眼差しで見つめる。

「原子力関連施設の完全封鎖と被曝者の治療体勢の構築。これがグレーデッドの要求だ。グレーデッドをかばっているのではない。原子力に関しては我々のレベルを遙かに超えているのだ」

「同感だ。だから権力者は原爆を欲しがる。人知を越える恐怖の塊かたまりを手にしようとする。それは国民のためではない」

鈴木とチェンががちりと握手する。



第三十三章  
分割

「本日、このテレビと同じテレビが中国で発売されます」

田中や山本や大家たちが見つめる画面に長蛇の列が映る。

「電源コードは付いているのかな」

田中を無視して山本が目丸くする。

「すごい行列だわ」

警察官が列からはみ出した者を押し戻す。

「わしも中国に行つて手に入れたいな」

立派な服の大家が膝を乗りだすと田中が呟く。

「このテレビとまったく同じものなんだろうか」

淡々とした逆田の声が流れる。

「オレンジ社の設計による画期的なテレビだという情報が流れただけでご覧のとおり行列ができました。中国の製造工場ではかん口令が敷かれて製品の内容は不明です。政府ですら分からないようです。ウワサですがiフォンやjパッド・オレと連携できるようです」

「やっぱり！」

田中が手を打つ。

「オレンジ社は製品の秘密を条件に中国での製造に踏み切りました。当初中国政府はどんなテレビを造るのか内容を明らかにしない限り製造を認めませんでした。スミス財団のスミス氏が

紹介したサムシング社のキム・イーチ会長のアドバイスを受けたオレンジ社のステイブ・ゲイツは『原爆や兵器を製造するのではない。単なるテレビだ。それならコストは高くなるが、秘密をキチンと守り技術力の高い日本や韓国で製造する』と突っぱねました。すると中国の総書記が直接ステイブ・ゲイツを招いて無条件で認可しようです」

画面はまだ元気だったころのステイブ・ゲイツと中国の総書記がにこやかに握手する映像に変わる。

「やっぱりこの交渉の裏にはスミスさんとキム・イーチさんがいたんだわ」

「詳しい経緯は不明です。しかし、中国はしたたかな国です。諜報員をオレンジ社の工場に潜り込ませようと思いました。ところがことごとく発覚したようです」

逆田は間を置くように言葉を止める。

「ステイブ・ゲイツはどんな手を使ったんだ？」

田中の疑問を待っていたかのように逆田が応える。

「ステイブ・ゲイツは信頼関係の構築を何よりも優先しました。きつちりと信頼関係が構築された組織は、信頼関係が曖昧な人間が侵入してもごく自然に排除します。バイ菌が入ってきたらすぐに白血球が排除するように」

「ステイブ・ゲイツってすごいな。生きているのなら会いたい」

即座に山本が反応する。

「逆田さん。今の田中さんの希望、叶えられますか」

「いくらこのテレビを通じて突拍子もない報道ができると言っても、それは無理ですね」

\*

「発売されるテレビがこのテレビと同じなら大変なことになる」

田中の心配に山本が急に興奮する。

「そうだわ！」

「テレビはこれ一台だけだったから、地震が起きると分かっている、わしらは何もできなかった」

質素な服の大家が東日本大震災と津波と原子力発電所の事故を思い出して目頭を押さえる。

「そのとおりじゃ！ このテレビが普及すると、どうなるんじゃ」

急に立派な服の大家も興奮の仲間に入ると田中が低い声を出す。

「だから大変なことになる」

「真実が中国の国内中に報道されるぞ！」

質素な服の大家の目がかつと開くと画面にテレビを購入した若い夫婦が登場する。なんと逆田がその夫婦にインタビューしているではないか。周りを大勢の野次馬が取り囲んでいる。

「このパッケージはかなり重たそうですね。中身を確かめて購入したのですか」

大きな白い箱には橙色の蛍光色のオレンジマークがひとつだけ印刷されている。その下には

黒い文字で「TV」としか書かれていない。夫が短く応える。

「いいえ」

「そうですね。発売するまでどんなテレビか明らかにしないという大変不思議な製品でした。それなのによく思い切りましたね」

「オレンジ社の製品で今まで期待を裏切られたこと、ありましたっけ？」

「ありませんよね」

妻が追従すると夫が一気にまくしたてる。

「jフォンにしてもjパッド・オレにしても持ってないとバカにされた。俺たちはjフォンとjパッド・オレで結婚したんだ」

夫がパッケージを地面に置くと妻を抱きしめる。

「ところで、そのパッケージ、ここで開けてみませんか」

「いいですよ。俺も妻にそう言おうとしていたんだ」

「早く開いて！ ダーリン！」

夫が乱暴にパッケージを開く。周りから大きな歓声が上がると逆田を押しつける不屈き者も現れる。すぐ白い液晶テレビが現れる。

「なんだ！ これは？」

第一声は落胆の声だった。初期の液晶テレビのように画面周りの縁がやたら広い。パッケージ

ジに入っているのは液晶テレビだけで電源コードもアンテナもリモコンもない。もちろん取扱説明書も保証書も見当たらない。これまでのオレンジ社の製品も素っ気なかったが、それでも薄い説明書や取扱についての注意事項が簡素に書かれたリーフレットが添付されていた。

沈黙が周りを包む。ようやく夫が妻に告げる。

「店に戻るぞ」

夫はテレビを肩に載せると人混みを押しつけて店に向かう。妻も元の形を留めないパッケージを引きずって夫に続く。そのとき誰かが大声を出す。

「何か映っているぞ！」

いつの間にかそのテレビが輝いている。

「ほんとだ！」

\*

「これはいったい……」

その声に夫が白いテレビを地面に置く。

「映画？ ……じゃない」

画面には高速列車が高架軌道から真っ逆さまに落ちて地面に突きさる映像が流れる。

「これは明日開業する高速鉄道じゃないか！」

「脱線して車両が落下したんだ」

「どこで？」

落ちた高速列車がアップされる。窓が割れて血まみれになった人々が生々しく映しだされる。しかし、白煙が舞い上がって映像が見えなくなる。

「大変だ！」

テレビを見て興奮する人々の映像に田中や山本たちは生唾を飲む。あの夫婦とかなりの数の人が白いテレビを取り囲むが悲惨な画面に圧倒されて言葉を失う。

「これから起きる事故をあのテレビが流しているんだ」

そう言うと田中が全身を震わせて口から泡を吹いて倒れる。

「田中さん！」

質素な服の大家がひざまずくのと山本が田中の額に手を当てるのが同時だった。

「大変なことが起こる」

田中は起きあがって口元を拭う。

「どうしようもない」

質素な服の大家が落胆する。

「今から起きる事件のことよりもっと大変なことが……」

田中の言葉を山本が驚きを持って続ける。

「そう！ いずれこの事故に対する中国政府の対応が赤裸々にあのテレビを通じて報道される

ことになるわ」

そのとき画面から逆田の大きな声がする。

「この列車は北京上海間を走る高速鉄道です！」

「試運転中の事故か」

「それなら、あんなに乗客が乗っているはずないぞ」

再び逆田の音がする。

「試運転は今日まで。明日から営業運転が始まります」

逆田の周りが騒がしくなる。

「どうしてこんな映像がテレビに！」

「おかしいじゃないか。パッケージから取り出しただけなのに映像が！」

あちらこちらから大きなざわめきが起こる。

「ひょっとしてこのテレビは未来を映すことができるんじゃないか？」

「明日起こる事故を映しているとしても」

「いくらオレンジ社の製品だと言っても、まさか……」

「私の両親が予約している。明日この高速鉄道に乗って上海にやって来る！ 止めなければ」

これだけの人間がいれば冷静に分析する者もいる。

「映画のビデオじゃないか。これが放送ならおかしい。まずアンテナがないじゃないか」



### 第三十三章 分割

「そうだ！ 内蔵のSSDかメモリーに書きこまれたおまけビデオを再生しているんだろう」

「でも電源は？」

「バッテリーが内蔵されているに違いない」

「なるほど」

「かなり質の悪い冗談だな」

先ほどまでの興奮が急に収まってオレンジ社を非難する声上がる。

「オレンジ社のファンだが、この製品は問題だ」

「購入できないヒガミか」

「なに！ もう一度言ってみろ」

中年の男がテレビを買った夫の頭を小突くと妻が男に噛みつく。

「散々ただ見して、なによ、その態度は」

「うるさい！」

中年の男が妻の手を払うと髪の毛を掴む。

「痛い！」

「やめろ！」

警備に当たっていた警察官が割って入るが乱闘を止めることはできない。まるで伝染するようになっているところで同じことが起きる。

翌日、オレンジ社のテレビの映像どおり高速鉄道の脱線事故が起こる。中国政府はあのテレビの発売日に起こった大乱闘の報告をまったく受けていなかった。だから、この脱線事故の処理は初動からボタンを掛け違えたまま進行する。つまり事故処理自体が脱線することになる。

まず事故を隠そうとする。マスコミを統制しているといっても、取材を止めることは不可能だ。それでも高架軌道から列車が落下した付近を封鎖して取材を規制した。当然上空からヘリコプターで現場に近づくことができるのは中国軍、警察、救助隊それに鉄道院の幹部と鉄道事故処理隊だけだ。したがって地上でマスコミが取材する情報量は知れている。しかし、オレンジ社のテレビでは通常の報道とはまったく異なった詳細な映像を見ることができ、逆田が田中たちに告げる。

「その映像をこのテレビで紹介しましょう」

「テレビでテレビの映像を見るのか」

逆田が頷くとテレビの中にテレビが現れる。

\*

高い塀の中では鉄道院の幹部を中心に鉄道事故処理隊が救助隊に立ちほだかる。

「救助が先だ」

鉄道院の幹部が救助隊の隊長の胸を突く。

「救助？ 生存者などいるはずがない。無駄なことをするな」  
別の幹部がそびえるような高架軌道を指差す。

「あんな高いところから落ちたら全員死亡したに決まっている」

「なんと乱暴な見解だ！ 何のために我々はここに来たんだ！」

「そうか。そんなに仕事が欲しいのなら、ここに大きな穴を掘れ」

救援隊長が絶句する。静まったのを見計らって鉄道事故処理隊長が部下に尋ねる。

「重機はまだか」

「こちらに向かっているはずですよ」

「仕方ないな」

この緩慢なやり取りに先ほどの幹部が怒り出す。

「急げ！ 何をぐずぐずしている。早急に営業運転再開できなければ全員首だ」

「分かりました。しかし、重機が到着したらどうするんですか」

「何を聞いていたんだ。さっきから言ってるだろ！ 事故車両をすべて埋めろ」

さすがに事故処理隊長も驚いて幹部を見つめる。

「命令を復唱しろ！」

「分かりました」

ここで急に自宅でテレビを見つめるあの夫婦の映像に変わる。

「なぜ埋めるの」

「分かんらん。この事件をなかったものにしてようとしてるんじゃないわ？」

「そんな！ こんな大事故が起こったのに列車を埋めたって何もならないわ」

夫は頷くだけでテレビから視線を離さない。現場で指示する事故処理隊長の厳しい命令口調の音声が漏れると再び映像は現場に戻る。

「すべての車両をシートで覆え！」

「救助作業は？」

もう一度救助隊長が詰めよるが無視される。

「命令を実行せよ！」

このやり取りに先ほどの妻の声が割り込んでくる。

「救助が優先でしょ！」

夫の叫び声が響く。

「何ということだ！ 政府は人民を見殺しにするのか！」

どこからどのように撮影しているのか分からないが、画面に血みどろの乗客が映っている。

「た、助けて……」

「痛い、い、た、い……」

\*

オレンジ社の中国工場長が秘密高等検察庁に連行される。

「いったいこのテレビはどのようなテレビだ」

大柄な検察官が押収したテレビを指差す。

「知りません」

そう答えたとたん大きな音がして工場長が床に倒れる。検察官に張り倒されたのだ。

「高速鉄道の脱線事故が映しだされたという情報がある。でたらめなニュースを流して世間を混乱させるつもりか！」

「ほ、本当に、知らない、の、です」

口から出血した血を拭うこともできない真つ青な工場長を検察官が見降ろす。

「このテレビに何が映っていたのか、知らないはずがない」

倒れたまま工場長が弁明する。

「しっ、知りません。せつ、設計図どおり、せ、製造した、だ、だけです」

検察官が力一杯工場長の脇腹を蹴りあげる。

「うっ！」

そのとき、ひとりの男がドアから入ってくる。

「シュー、やめろ！」

同時に工場長の横まで走りこむとひざまずいてから「シュー」と呼ばれた検察官を見上げる。

「我が国の検察官は質問するとき、相手を床に寝かせるのか」

「お前は誰だ。誰の許可を得てこの部屋に来た？」

「総書記の指示だ。私は中国海軍大佐、チェン」

「大佐ごときの軍人に総書記が指示するはずがない。しかもここは海上ではなく陸上だ」  
ドア付近で咳払いがするとシューが狼狽える。

「長官……」

秘密高検長官と幹部たちの鋭い視線にシューが一步引く。

「うせろ」

しかし、シューは抵抗する。

「長官！ ちょうどよかった。このオレンジ社の……」

「うせろと言ったのが聞こえないのか」

「どういうことですか」

「鉄道院の事故処理隊長を先ほど総書記が解任した。更に秘密高検の関与も否定された」

「総書記が人民解放軍直属の秘密高検を無視したとでも」

「そうだ。総書記が人民解放軍の最高司令官であることを忘れたのか」

「それは形式上のことだ。このことは長官が一番ご存知のはず」

「シュー、お前はなぜこんなところで尋問しているのだ。鉄道院に借りがあるのか？」

形勢を見極めたシューは黙って足早に部屋から出て行く。すぐさまチェンは工場長の固まりかけた鼻の下の血をハンカチで丁寧に拭き取りながら進言する。

「長官。我が国はこのテレビで世界一正直な国になることができます」

「大佐。どういふことだ。教えてくれ」

「このテレビは真実を伝えるテレビです」

長官が首を傾げる。チェンは立ち上がるとシューが持ち込んだ例のテレビに長官の腕を取って連れて行く。すると画面にシューが工場長の脇腹を蹴りあげる映像が流れる。長官はテレビから視線を部屋の隅々に移す。そして首を傾げる。

「盗撮しているではありません」

落ち着きを取り戻した工場長にチェンが尋ねる。

「このテレビが完成したとき、製品チェックをしましたか」

「いいえ。生まれてこの方、こんな経験は初めてです。組み立てが終わると、そのまま梱包して倉庫に山積みしました」

「要は中国政府がこのテレビを製造させて欲しいとオレンジ社に頼んだから中国で製造しただけなのか」

チェンの言葉に反応したのは工場長ではなく長官だった。

「ときのアメリカ大統領がオレンジ社のスティーブ・ゲイツにアメリカでこのテレビを製造し

てくれと頼みこんだのを中国が横取りしたという類いの話を聞いたことがあるが……チェン、詳しく説明してくれ」

「このテレビによると鉄道院はこの事故を隠蔽しようとした」

「そんなことするはずが……」

「いいえ。だから鉄道院事故処理隊長を総書記が解任した」

「わかった」

そのとき職員が入ってきて大声で報告する。

「シューが事故現場に向かったようです。それに……」

「やはりそうか。権益の塊の鉄道院に身を寄せているのかもしれない。しばらく泳がせよう」

チェンが長官に耳打ちする。

「シューだけではありません」

「どういう意味だ」

そのときドアが開くと大きな声がする。

「長官を拘束しろ！ チェンもだ」

先ほどの職員を突きとばして秘密高検の次長と武装した数人の兵士が銃を構えて部屋に乱入する。

「次長！ 何の真似だ」



しかし、チェンは狼狽えることなく次長を睨み付けながら立ちはだかる。

「人民解放軍の幹部の一部に総書記をよく思わない者がいる。彼はその幹部の信任が厚い人間だ」

「チェン。海軍の大佐にしておくのがもつたいないぐらいに優秀な軍人だ。お前の手で長官を逮捕しろ」

「その前に後ろを見る」

次長の後ろで銃を構えていた兵士が銃を床に放り投げると手を上げる。

「こんなこともあろうかと、海軍の上陸精鋭隊をこの近くに待機させておいた」

ほっとした表情をしながら長官は次長に告げる。

「お前が言うとおおり、チェンは大した男だ」

そして部下に命令する。

「すぐ尋問室に連れて行け。しかし、高検の建物内で次長を逮捕して即尋問することになるとは情けない話だ」

今度は苦笑する。

\*

「さて事故現場が心配だ。ヘリコプターを手配しろ。それに工場長をオレンジ社にお送りしなさい」

工場長が長官に大きく首を横に振る。

「長官！ 私もご一緒させて頂きたい」

「それは無理だ」

「我が社のテレビを買った人すべてがこの事故を知っています」

「そのような」

「長官。工場長にも来て貰いましょう。話はヘリコプターの中で」

チェンが促すと長官が改めて部下に指示する。

「ヘリの準備は？」

「あと二、三分は掛かります。屋上にご案内します」

長官がチェンと並んでエレベーターホールに向かう。

「チェン大佐。遠慮なく忌憚のない見解をお願いしたい」

長官がチェンに深々と頭を下げる。

「今回の事件で鉄道院は穴を掘って事故車両を埋めようとしているが、自ら墓穴を掘ったようなものです」

「鉄道院が高速鉄道の利権に関わっているのは分かっていたが、なかなかしつぽを掴めなかつた」

「身内に鉄道院と癒着する者がいれば無理です」

「凶らずしもこの大事故で露呈された。私の監督不行き届きだ」

「始めに申しあげましたが、中国はこのテレビで世界一、正直で透明な国になるでしょう」  
「ついでに北京の汚れた空も透明にして欲しいものだ」

チェンが初めて微笑むと長官がチェンの手を固く握る。

\*

重機が轟音を立てて大きな穴を掘っている。

「何をするつもりだ！」

現場に到着した長官が高架軌道付近で作業をする鉄道院事故処理隊に向かって怒鳴る。

「隊長がいなくなって作業を中断しましたが、再び穴に列車を埋めると命令されました」

「誰に！」

「シュー秘密検察官です。それに陸軍からも要請がありました」

「私は秘密高検長官だ。シューをこの事件の担当から外して私が直接指揮する」

「待ってください。私たちはいったい誰の命令に従えばいいのですか？ 現場は大混乱です」

「間もなく総書記が来られる。とにかく私の命令に従え」

「わ、分かりました」

「救助優先だ。鉄道事故処理隊は救助隊を手伝え。息が切れていても病院へ搬送しろ。それに証拠は隠すな。何かあったら些細なことでもすぐ報告せよ」

「長官！ 我々はこの命令を待っていました」

事故処理隊員の表情が明るくなると全隊員から歓声が上がる。

「もう、どんな妨害があっても我々は救助を優先する」

「すぐさま救援隊長が反応する。」

「みんな！ ひとりでも多くの乗客を助けるんだ。そのために死を恐れるな」

救助隊、そして事故処理隊が活発に動き始める。長官が頷くと感激でうつすらと涙を流しながらチェンは軍用携帯電話を手にして告げる。

「陸軍の方は私に任せてください」

チェンは陸軍のある幹部に連絡を取ると強く救助活動を迫る。そんなチェンに長官が驚く。

「海軍の大佐が陸軍を動かすとは」

チェンが電話を切ると工場長に向き合う。

「工場長！ あなたがああのテレビで見たこの現場はどうだった」

「言ってもいいんですか」

「心配しなくていい。あなたが何を発言しようとして私がすべてカバーする」

「分かりました。自ら同行させて欲しいといった以上、私も逃げるつもりはありません」

長官も工場長を促す。

「救助作業に役立つはずだ。是非昨日見たことを教えて頂きたい」

「まず、あの大きな穴。あそこに落下した事故車両を埋めました」

「なんだと！」

チェンと長官が同時に叫ぶ。

「事故車両を隠そうとしたんだ」

「何とか、それを防いだということか」

「それから……」

工場長の話が続く。チェンと長官はそのつど驚きながらも黙って聞く。チェンは工場長に背を向けると特別携帯電話で総書記を呼びだす。

「秘密高検長官が善後策を講じていますが、警察、陸軍が事実を隠そうとするかも知れません。そのぶん乗客の救助作業が遅れます。救助を最優先するよう、大号令を掛けて頂きたい。この事故の対応次第で中国の信頼性が天と地ほどに変わります」

「もうすぐそちらに到着する。チェン、もうしばらく苦勞を掛ける」

チェンは再び工場長の話の続きを聞く。

\*

「政府の対応はオレンジ社のテレビで放映されたようなむごいものではなかった」

「オレンジ社のテレビはいい加減だ」

「そんなことはない。事故が起こったことは事実だ。すごいテレビじゃないか。未来を映すす

「おいテレビだ」

テレビから流れる議論に田中と質素な服の大家が深いため息をつく。

「僕らは地震や津波や原発の事故を事前に知っても何もできなかった」

「そうだ。わしらは何もできなかった」

「未来を知っても何もできない」

立派な服の大家が割って入る。

「じゃが、中国政府というか、チェンや秘密高検の長官が手を打ったぞ」

「どこが違うのか」

田中がそう言うってから小膝を叩く。

「このテレビで一日先に起こる鉄道事故の映像を多くの人が見た」

「それを知った政府がテレビの映像と同じ状況にならないように踏ん張った！」

「僕らとはまったく違う！」

田中と質素な服の大家が手を握る。

「わしらの無念さを中国政府が晴らしてくれた」

「アホか」

立派な服の大家が水をさす。

「アホとは何だ」

質素な服の大家が立派な服の大家の襟口を掴む。

「兄弟ゲンカは止めて！」

山本が仲裁する。

「兄弟ゲンカ？」

両大家が声を揃えて山本を見つめる。

「いい歳をして見苦しいわ」

山本がプイッと視線をずらす。そのとき山本の身体がブルブルと震える。同時に田中の身体も同じように、いや、それ以上に震える。両大家が腰を抜かしてふたりを見つめる。

「パパー」

「リングラング！」

山本の身体の輪郭が消えるほど真っ赤に輝くと狭い田中の部屋がまるで火事場のよう燃え上がる。炎の中からふたつの身体が現れる。そして輝きが弱くなると赤いワンピースを着たりリングラングと質素なグレーのスーツの山本が立っている。両大家も分離した山本もリングラングも太陽を直視して網膜が焼けたように周りをキョロキョロと見渡す。やがて視力が正常に戻ると、まずリングラングが声を上げる。

「佐々木」

いつの間にか田中の横に目をうつすらと開けた大柄な佐々木が立っている。

「ここは？」

「ニューヨーク空港じゃないことだけは確かよ」

狭い田中の部屋に六人もいる。

「パパ、どうしてこんなところにいるの？」

「お前こそ、どこへ行ってたんだ」

そのときテレビから逆田の声がする。

「どうやら、オレンジ社のテレビが大量に供給されたので封印が解かれたようです」

山本が画面の逆田を指差して叫ぶ。

「逆田さん！ どういうこと？」

山本の指先の画面に穴が開くとそこから波紋が広がる。その波紋の中心に指先から吸い込まれて山本がテレビの中に移動する。

「こういうことです。山本さん」

逆田に山本が大きく頷く。

「要は見る人がいないとこのテレビはただの箱だということ、ですね」

「そうです。このテレビは……」

ここでプツンと電源が切れる。



第三十四章  
ミラーアリカメラ

「元に戻っちゃいましたね」

「わしはこの方がいい」

田中の部屋には質素な服の大家と田中しかいない。立派な服の大家はリングラングと佐々木を連れてあの高層マンションの最上階の部屋に戻った。

「今回の出来事、田中さんはどう思う？」

「よく分かりません」

田中はドアを開けて外に出ると背中に不安そうな大家の声が届く。

「どうした。どこへ？」

すぐ田中が戻って来る。

「隣に山本さんがいるかどうか確かめました。でも表札はないし電気も付いていませんでした」

「そうか」

「ニューヨーク空港で僕が佐々木と合体して、山本さんがリングラングと合体したように見えたんでしょう？」

「確かに」

「僕の空想を聞いてくれますか」

「田中さん。わしはいつも言ってるだろ。田中さんだけが頼りだと」

「わかっています。でも、今から言うことは突拍子もない話です」

「これまでの事件のことを思えば、わしは驚かんぞ」

「今までテレビの画面のことばかり気にしていました」

「確かに」

「でも、このテレビの画像や動画はどんな道具で撮影しているのか、気にもしなかったし、考えようともしなかった」

「動画？」

「映像のことです。どうも立派な機材ではなくデジタルカメラで撮った画像や動画、いえ映像ではないかと」

「画像はともかく映像はカメラでは撮れないぞ」

「そんなことはありません。デジタルカメラで映像も撮影できます」

「へー！ わしが若いときは写真はカメラで映像は8ミリという撮影機を使っておった」

「歴史で学びました」

「歴史！ わしは過去の遺物か！」

「そんなに興奮されては話が進みません」

「すまん」

田中が大家を無視して柵からカメラを出す。

「これ、一眼デジタルカメラです」

「これが？」

大家在田中からカメラを引ったくるとしげしげと見つめる。

「ペンタプリズムがない」

「ペンタプリズム？」

「こう見えてもわたしは写真愛好家だ。カメラと数本の交換レンズを持って景色や花や祭りなどをよく撮ったものだ」

「へー」

田中が大家を見直す。

「ところでペンタプリズムってなんですか」

「ほー、田中さんでも知らないことがあるんだ」

「僕は博士じゃないし、貧乏だからカメラなんか買えなかった。ところが大家さんのお陰で生活費に困ることがなくなったので、このカメラを買ったんです」

「一眼レフはその天辺に五角形のプリズムが入ってる」

「五角形……ペンタゴン……ペンタプリズムか」

「しかし、このカメラの上辺は平らだ」

「なにか不都合でもあるんですか」

「たとえば花を撮るとしよう。花を確認しながら撮影できるといふ画期的なカメラが一眼レフなのだ」

『一眼レフ』と言うカメラがあると言うことは『二眼レフ』というカメラがあるんですか？』

「三眼レフというのもあったらしい。わしの若い頃はカメラと言えば二眼レフだった」

「カメラ屋さんにレンズが縦にふたつ並んだ箱のような中古カメラが置いてあったのを覚えて  
います」

「まさしく二眼レフ、メガネを縦にしたようなデザインだったろ」

「うまいこと言いますね。横に置けば箱にメガネが付いているような感じでした」

「二眼レフというのは人間用と撮影用にレンズがふたつあるカメラのことだ」

「ふーん」

「撮影者が撮りたいものをフィルムの中のレンズとは別にもうひとつのレンズで確認する。つまりふたつのレンズを使ってできるだけ撮影者の意図に沿った写真を撮るために生み出された  
アイディア、それを二眼レフカメラが実現したのだ」

胸を張る大家に田中が合いの手を入れると大家にスイッチが入る。

「しかし、フィルム前のレンズにできるだけ近い場所に別のレンズを取りつけても撮影者の見たものとフィルムに映るものとはまったく同じものではない。ましてやレンズを交換して望遠  
レンズや広角レンズに付け替えると撮影者が見たものとフィルムに届くものはまったく違う。  
つまり撮影者が覗くレンズも望遠や広角レンズに取り替える必要が生じるのだ！」

大家の得意気な話が続く。

「一眼レフの場合、レンズを望遠レンズに変えようと、広角レンズに変えようと、魚眼レンズに変えようと、レンズを通った光がそのままファインダーに届く。つまり見たまま撮影できる。この仕組みをTTL (Through The Lens) と呼ぶのだ」

「その仕組み、もう少しやさしく説明して貰えませんか。そこに重大なヒントがあるような気がします」

「レンズを通過した光を四十五度傾いた鏡で反射させて進路を上部に変える。このままでは被写体、たとえば花の上下が反対なのでペンタプリズムで逆転させて人間の目に光を届ける。だから撮影される光そのものをファインダーで確認できるのだ」

「なるほど」

「だが、まだ問題が残っておる」

「えー？」

「この仕組みでは本当に見たままの被写体、つまり花を写すことができないのだ」

「でもひとつのレンズを通して人間の目に、そしてフィルムにも写したい花が届くんでしょ」

「一瞬のタイムラグが生じるのだ」

「大家さん。済みませんがこういう類いの精密な話の役割分担は僕なんですけど、なぜここまで大家さんがセリフを続けるんですか」

「黙って聞け」

田中が身を引く。

「一眼レフではシャッターボタンを押した瞬間、ミラーが跳ね上がって目に届く光の経路をフィルムに届く経路に変更してから、フィルム前のシャッター幕が横にスライドしてフィルムを感光させるのだ。このタイムラグが見たままの光景が撮影できない理由だ！」

「ほんの一瞬、タイムラグが生じるのか！」

田中が大家の説明を別の言葉に変換する。

「光の経路を分けるのが鏡。英語で言うミラー。ファインダーを覗いているときはレンズからの光をフィルムの前に立ちはだかるシャッター幕に直進させるのではなく、その前に置いた四十五度に傾いたミラーで上に反射させる。その反射光は上下逆さまなのでペンタプリズムで百八十度ひっくり返してファインダーを覗く目に届ける。そしてピントを合わせてシャッターを切るとミラーが跳ね上がって幕が横に走る。ミラーに邪魔されなくなった光がフィルムに向かう。そして撮影者が見つめていたほんの少し後の被写体が撮影される」

大家が満足そうに微笑む。

「ミラーがファインダーとフィルムへの経路を振り分けるんですね。今はデジタルの時代ですからフィルムの代わりに撮像素子というセンサーを使いますが、原理は同じなんだ」

「だが、ミラーレスというからには光をファインダーとセンサーに振り分けるミラーがないのか」

今度は大家在質問に回る。

「そうです」

「そんな一眼レフカメラはあり得ない」

「でも何種類ものミラーレス一眼レフが販売されています」

「信じられん。いったいどんなカラクリを使っているんだ」

「最近知ったんです。僕は素人ですから乱暴な説明になるかも知れませんが。簡単に言うところ  
です」

「乱暴でかまわん」

田中と大家在の立場が入れ替わる。

「分かりました。間違いを恐れずに説明します。レンズから入ってきた光は撮像素子、つまりセンサーに捉えられます。そのセンサーの情報がファインダー、正確には電子ファインダーと言いますが、そこに送られたり、カメラ背面の液晶モニターに送られたりします。すなわちセンサーで捉えた映像情報がデジタル化されて直接ファインダーやモニターに送られるます」

「デジタル化されてミラーが不要になったのか」

「もちろん、ペンタプリズムも不要になりました」

「そうすると随分小型化されるな」

大家は手にしたカメラを確認する。そしてあるボタンを押してレンズを外す。



「このカメラ、確かにレンズ交換式カメラだ。しかも小さくて軽いな」  
そして再びレンズを装着すると背面の液晶モニターを見ながら頷く。

「フィルムは入っているのか？ 一枚写しているか？」

「フィルムじゃなく代わりにメモリーが入っています」

「メモリー？ 記録装置だな」

そう言いながら大家在田中を写す。モニターにその画像が表示される。

「今写した写真が！」

大家在興奮しながら続ける。

「ピントを合わせるのを忘れた……それに部屋の中なのに鮮明に写っておる」

「オートフォーカスと言ってカメラがピントを合わせてくれるし、暗いところでも自動的に感度を上げてフラッシュなしで写せます」

「驚きだ！」

大家は感激して部屋中のあちこちを写す。そのたびに子供のような歓声を上げる。

「大家さんはデジタルビデオカメラを使いこなしているのに、デジタルカメラを知らないなんて不思議だな」

「わしは未だペンタックスSPという一眼レフカメラを使っておる。しかし、最近現像してくれる店が少なくなつて、いや、それよりフィルムが手に入りにくくなつた」

「この際、デジタルカメラの一眼レフ、ミラーレスじゃなくてミラーアリの一眼レフに買い換えは？」

「ミラーアリのデジタル一眼レフもあるのか」

「あります。と言うことはペンタプリズムも付いているはず」

「でも重いんじゃない？」

「当然ミラーレスの方が小さくて軽いです」

「歳をとったから軽い方がいいな」

ふたりはフーツとため息をつく。

「ところでカメラの話題で盛り上がっているが、元々何の話をしようとしてたんだ……」

「あつ！ 思い出した。このテレビはいったいどんな撮影機で取材した動画を流しているのか。

それに僕と佐々木、それに山本さんとリングラングがなぜ合体して、また分離したのか。その

原因はカメラじゃないかと言おうとしたら脱線してしまった」

「すまん、すまん」

大家が頭を下げる。

「大家さんのせいじゃありませんよ」

\*

「ミラーレスカメラじゃなくて、ミラーアリカメラなんです」

「ミラーアリが鍵を持っていると言うのだな」

「そうです」

大家がカメラをテーブルにおいて田中を促す。

「特殊なミラーを組み込んだカメラではないかと思うんです」

「特殊なカメラか？」

田中が目を閉じる。大家が膝を乗りだして田中を見つめる。

「ミラーがふたつの世界を振り分けるんです」

「！」

大家が言葉を飲み込む。

「ふたつの世界。ひとつは僕らのいる世界。ファインダーで見ている世界です」

「もうひとつは？」

我慢できなくなって大家が質問する。田中は目を閉じたまま言葉を続ける。

「ミラーが跳ね上がって撮像素子を介してメモリーに記録します。そう、もうひとつはメモリーの世界」

大家は再びカメラを手にするとあらゆる方向から観察する。そしてあるキャップをこじ開ける。

「山本さんが持っていた撮影機も同じ原理で僕や佐々木やリングラングを撮影していたんじゃない」

ないかと思うんです」

大家が器用にカメラからメモリーカードを取り出す。

「この中に別の世界が存在するのか」

田中が目を開けると軽く首を横に振る。

「僕のカメラのメモリーにそんな世界は入っていません」

「あるとき、確かに山本さんは撮影機を回していた」

「回していた？」

「要は撮影していたということだ。昔は撮影機の取っ手をぐるぐる回して長いフィルムに記録したのだ」

「なるほど。それはさておき、あの撮影機がふたつの世界を振り分けていたと思うんです」

大家はカメラをテーブルに戻すと腕を組む。

「しかし、わしは撮影されたという記憶はない。なのに分離しておる。田中さんや佐々木、山本さんやリングラングのように合体していないぞ」

「前半の疑問にお答えします」

田中の軽い言葉に大家は身構える。

「大家さんは気付いていなかったのかも知れませんが、山本さんがしょっちゅう撮影していましたよ」

「知らなかった」

「大家さん。このテレビから始まった不思議な事件の数々、もう後に引くことはできません」  
大家が真剣に頷いて見せる。すると突然テレビの電源が入る。

「この物語、ここで転機を迎えそうですね」

目の前のテレビにいつものグレーのスーツを着た逆田と山本が現れて頭を下げる。

## 第三十四章 ミラーアリカメラ

# 後書

この作品は第一編「テレビの内と外」と同じく2012年にホームページに掲載した長編小説「成程1」を分割して改訂加筆したものです。いわゆる「成程1」の後編に当たります。他の拙著の作品と同様、パソコンやスマホでテキスト原稿やPDF原稿が読みにくいというお叱りを受けてKindle版の電子書籍として再発行したものです。

また、拙著「C・OS・M・OS」シリーズの下敷きになった「トリプル・テン」シリーズがあります。その下地として書いたものがこの「成程」シリーズです。興味のある方は「C・OS・M・OS」や「トリプル・テン」もお読みいただければ幸いです。

後書

奥付

「なるほど」 2

(第二編 新旧分合)

2012年1月 初版 (PDF版) 発行

2020年5月 改訂版 (電子書籍版) 発行

著者 照 伝光

発行者 照 伝光

後書

(<https://www.cosmos123.com/>)